

## 汀線都市

われわれが魚類とのホモロジーについて語りながら、そのアナロジーを無視するというのは、今日のいかなる病理に基づくものであろうか。

—— M・S 『始源と終末の海洋生物たち』

### \*示準化石

砂浜から海に向かって伸びるその石畳に円柱が一本、天を指して揺るがない。高さは一メートル弱か。成長したアフリカ象の下肢よりやや短く、太さにおいてわずかにまさる。

かなり硬度の高い金属から削り出されたと思われるその表面は、折からの初

弦を冴え冴えと映しだしている。粗い砂粒混じりの風が、時折円柱の側面に激しくたたきつけると、遠い機銃掃射が蒼ざめた砂丘に響きわたるが、円柱の震えはそれと確認できるほどではない。

柱の上面も、冷たい水を張ったように平らかである。そこに中天の蒼月のかわりに一冊の電話帳がひっそりと置かれている。表紙も目次も失われたその紙塊のうねるかたちは、さながら末期の恐竜が世界に向かって最後の一瞥をくれているかのようである。

長い首を力なくもたげ、砂丘の夜景を濁った瞳から脊髄にすべらせる紙粘土のディプロドクス……。その広い背はかつておびただしい文字と数字に埋めつくされていたはずだが、今ではページ数を示すアラビア数字と、それに続くゴシック文字のほかはすべてが消失している。

本文の6。ポ活字はおそらく、海風が砂丘の彼方へと運び去ってしまったのだ

ろう。幾重もの紙層に都市を封じ込めようとした者たちの夢は、すでに白い末路を辿り終えたかのようだ。

下から巻き上げる風がどこからか一枚の紙片を運んできた。金属柱の稜線を低くかすめたかと思うと、それは曲技飛行のように数回反転し、円柱の側面にはたと張りついた。

A4判の真新しい紙の光沢は、どうやら二〇世紀後半のコピー用紙と見えた。風がおさまっている間、それはかたつむりほどの速度で円柱の側面をじりじり滑り落ちていった。そして辺のひとつが砂表に達した刹那、次の風に攫われて高々と舞い上がる。上空でまた二、三度反転すると、横書きのワープロ文字のまばらな文字列と、肩口の朱印の滲みがつかの間月光に浮かび上がった。

都市世紀の公式文書を証す美しい文様も、砂丘世紀の今となつては、残念ながらふさわしい解読者をもたない。それが人々にあまねく流布していたかの世

紀末にも、その試みはたとえば地下鉄の記号論者に委ねられていたのだが。

風は都市の最高層建築物を砂丘深く葬り去り、なおも怒りがおさまらぬかのように激しく吹き付けている。一方、直立する金属柱は、月光のもとあくまでも静謐である。そして灰色の凝固物もまた、都市の示準化石となる日を静かに待ち受けている。

\*遠いざわめき

二枚重ねにした書類の端をクリップすると、それを三つ折りにして業務用封筒の間にすべりこませた。蛍光スタンドの脇に投げだされた腕時計の針が反対方向を指して今しも重なるうとしていた。

細い煙草をくわえたまま、Mは机の甲板に手をつけてゆっくりと腰を浮かせた。休暇申請がピークに達する真夏の週末、その森閑とした室内風景がゆるり

と視野に流れこんでくる。

傾いた机には書類一枚、帳簿一冊載っていない。出入口近くの机に、バウムクーヘンのように置かれたピンクの膝かけ、その隣には小さな赤い牛皮製のハンドブックが見える。それで今日の出勤者が彼だけでないことがわかる。

Mは宛て名の横に赤ボールペンで〈書類在中〉と書き込んでから、揺らめくようにして席を離れた。

係ごと、担当ごとに集められた机は、四個でひと組みになるように配置されている。それが全部で四組ある。

各ブロックがつくりだす微妙な迷路を、Mは暗闇を行くように、突き当たりながら徘徊する。特大のガラス製灰皿が鎮座する机をすぎ、白いマスコット人形が小首を傾げる机に行き当たると、手を伸ばしてボールペンを一本拝借した。

お隣の、ホッチキス大の爪切りがアイドル歌手の唇と切り結ぶ机では、陶製

の灰皿目がけて吸い差しを投げ込む。最後に二つの窓を背にした両袖机にたどりつくと、抽出しから印鑑を取り出して、書き上げたばかりの書類の隅に捺した。

机を離れる寸前、Mの手には生命保険会社の社名入りマツチが収まっている。白いラベルに書き添えられているのは凄腕で知られる女性勧誘員の名前。この春には三人目の孫を抱いたというその老女が、斑紋の浮き出た手でボールペンを動かすさまを思い浮かべる。その一筆ごとにぼくの未来は確実に食い荒らされていくのだ。

ねっ、今のうちですよ、Mさん。何と言っても年齢が上がれば上がるだけ、保険料も上がってしまうんですから。前歯を欠いた口が空洞を広げる。ほら、この表を見てご覧なさいな。三十歳で入るか、三十五歳で入るかで、月々こんなに違ってしまふんですよ。ねっ。

そうだな、前歯のお婆さん。あなたの青空のような計画性が、ぼくの人生設計に完璧に役立つことは請け合うよ。つまり、明るい家庭の建設とか、豊かな老後の保証とかいうやつにね。ただ、こちらの都合を少しだけ言わせてもらえば、未来が狭まるような選択からはもう少し離れていたい気分なんだ。

Mは慎ましい公務員生活のパスポートを、掌が痛くなるほど握りしめてから屑籠に放り投げた。

最後に到達したのは一番入口寄りの机。机の主は休憩時間の度に飛び切り苦いお茶を煎れてくれる女子職員である。Mは郵送物のトレイに書類を投げ込もうとして、ガラス板の下の写真に目を止めた。

それは昨秋賑々しく挙行された部内旅行のスナップで、画面中央に突き出しているのは部長の鏡餅の腹。その左右に思い思いの服装で広がる男女約二十名。いずれも精一杯のポーズをつくっているが、規格品の笑顔を踏みはずす者はな

い。最前列に陣取る写真の所有者も、スカートからはみ出た丸い膝小僧を抱え、屈託なげに微笑んでいる。いや、そうではない。膝小僧の背後に立つ長い顔、すなわちMの表情だけが異質である。唇は笑う形に開いていても、生気のない顔はまるで能面だ。そして杏形の眼は、カメラの背後を横切るものに魅せられたように遠い。

——実際、この時のわたしの感覚は、遠い雷鳴のごときものに向けられていたはずだ。そう、視覚よりはむしろ聴覚に。それにしても、なぜいつもそうなのだろう。

雲間のざわめきに耳を澄ませ！

不意に駆り立てる声がある。次の瞬間、Mは彫像になる。しかし、訪れはついに訪れず、魔眼に射すくめられた男を救うのはつねに定型化した呪詛の言葉、その反復、つねに……。



へリリン、リン。リン……」

Mの手が反射的に受話器へと伸び、一瞬震えて宙づりになる。次いで幽霊蜘蛛の足になって落下する。

「はい、こちら管財課ですが」

受話器の底から、かすかな唸りを発して風が吹き寄せる。切れ切れに浮かぶ、若い男の抑揚を欠いた声。

「もう、いい……、書類の……んて……」

「えっ、どちらにおかけですか？」

風の音はさらに強まり、声に代わって砂の弾けるような音が鼓膜を打つ。思わず耳からはずした受話器を顔の前に立てながら、送話口に向かって声を強めた。

「どうも電話が遠いようですが」

「おまえの書類の件だよ。もう、わかっているだろ……」

今度は輪郭の確かな声が、銀色の蛇になって回線をぬけてくる。その物言いの意外な明るさに、Mは一瞬たじろぐ。

「もういいんだよ。あんな……な……」

「ちよつ、ちよつと待つてください。一体何のこと？ もしもし、あなた誰？  
もしもし、も……」

#### \* 聖蛇

シーツを胸の上で押さえたへMa子<がベッドの上に裸の上半身を起こしている。その横顔は窓ガラスを透過する陽光のせいで深い藍色に翳り、うつむいて懸命に涙を堪えているように見える。窓外には赤や青や緑の屋根、屋根、屋根……が海岸線まで続いているはずだが、今は乳色の光に遮られて見えない。

〈Ma子〉はシーツを踵の上まで引き寄せると、豊かに肉のついた両肩をゆっくりと背後に投げた。

「ああ、昨日から再開しているんですか。わかりました……」

受話器を置きながら、Mはトビウオの翅がナイフのようにきらめく様を想像している。そして、昨夜来の嵐もどうやら収まったようだと思つて、小さく嘆息をもらした。

結局、辞めるつもりなんかないんでしょ、あなた。洋服ダンスの扉の鏡に向かいながら、昨夜の言葉を低く反芻する。そうさ、本業が軌道に乗るまではな。ネクタイを絞る手を休めたMは、彼女の寝顔が映るように扉の角度を少し変えてみる。はみ出した栗毛色の髪が扇形に広がっているほかはずべてシーツの中。〈Ma子〉の体はその中央部に鋭く膝を折ったかたちに盛り上がっている。

ねえ、本業ってなに？ カメラ雑誌の編集助手のこと？ お友だちに頼まれ

た登山書の翻訳のこと？ おばさんが開いているスナックを手伝うこと？  
それともSF作家になることだったかしら？

今言った全部だよ。Mは扉を両手で押して鏡の前を離れた。

ベッドの前脚の下に灰色のブラジャーが蹲っている。草原の小動物の死骸を  
思いながら、Mは尻尾の先端を爪先にからめとる。そのまま両足を高く掲げて  
ソファーに身を投げた。そうなったら、役所などはきっぱりやめて、晴れて自  
由の身になるのさ。足先で弄んでいるうちに、二本の紐はしだいにきつくMの  
両足指を結びつけていく。いつもそんなことばかり言っているのね。両踵を強  
く擦り合わせると、もつれはさらに進んで神経もいつそうささくれ立った。紐  
はまるでへMa子へから送られた使者のように、怪しい力を発揮し続けている。

へ明日の晩にまた電話する。今日はこれから仕事に出て、夜はYのアパートに

泊まるつもりだ。あさっては予定を空けておく

Mはテーブルのメモに走り書きすると、両手を椅子の肘掛けに突いて、よろけつつ立ち上がった。シーツの端から一瞬眩しげな目を覗かせたへMa子へが、かすかな呻きとともに寝返りを打つ。滑り落ちた白布の下から、丸い肩と深い背のくぼみ、そして見事に盛り上がった二個の丘陵があらわれた。危うく体勢を保つMは、へMa子への目の縁に残る赤痣に気をとられ、その地中海的双曲線を見失う。

——何かよほど強く圧迫されたにちがいない。やはり水中マスクなのだろうか？

Mは手の支えはそのままに、ゆっくり左足を持ち上げてみる。こんどはなんなくほどけた聖蛇が、カーペットの砂漠で白い抜け殻に還った。それを今度は

右足で思い切りベッドの下に蹴り込んだ。

「どこへ行くの？」

カセットやCDの山を踏み越えて進むMの背に、重い水のようなアルトが貼りついた。ドアノブに手をかけながらメモの言葉を反復してやる。部屋の奥では、さらに二、三の言葉が気泡のごとく漂ったが、それは扉の閉まる音に重なってしまった。

夏の陽射しに踏み出したMは、〈M a 子〉の脊椎が水平線に浮かぶさまを描いている。それから深海探査の壮途に就くにしては、あまりに不用意な自分に気づいて、かすかな、ほとんど風のような笑いを浮かべた。

\*イルカ、その他の記号

「課長はただいま県外に出張しておりまして、明日の午後にならないと戻らな

いのですが……。ああ、その件でしたら、本人から言付けを預かっています。ええと……。よろしいですか？」

若い男の金属的な声が耳に木霊する。Mは首を振って受話器を遠ざけると、銀ぶち眼鏡を光らせる能吏タイプの課員を回線の向こうに立たせた。

「えーっ、ご照会の件につきましては、所管部分についてのみ記入の上、所管外の部分については企画課で回答させるよう処理いたしました。以上……と」

Mは男の答えに含まれた揶揄の調子を敏感に嗅ぎとる。

「それはおかしいなあ。昨日の話では、すべて管轄外の内容だったので、ひとまずこちらに返送するということだったよ」

「そうですか。でも、メモは今読み上げたとおりですよ」

いつのまにか背後に立っていた丸い膝小僧が、Mの様子を伺うようにして白い角封筒を机の隅にすべらせていった。

「だったら係長に代わってもらえるかな？　最初、係長経由で文書が回ったはずだから。……えっ、今日は有休？」

Mは次第に声を荒げながら、錐のような視線が右頬に刺さるのを感じている。発信源はあらためて探るまでもない。彼が受話器に手を伸ばした途端、分厚いレンズの底を光らせはじめたY係長である。左右のつめに何度目かのヤスリをかけながら、その視線はとうに指先を越えていた。

「そう……、だけど、なぜ企画課なんかに。そちらで全部処理できる案件じゃないの。まあ、おたくに言っても仕方ないけどね。でも、これで何度目の問い合わせだと思うの。いいかげん……」

さらに言い継ごうとしたせつな、受話器を叩きつける音が鼓膜を直撃した。Mは反射的に振り返って係長の眼鏡を睨みつける。とたんに視線をしまい込んだ小心者は、引き出しの中を探すふりを始めた。



週に一度、庁内の理髪店で入念に染め上げられる漆黒の髪が、書類の山から見え隠れしつつ、蛍光灯の光を妖しく照り返す。Mはその反射光の中心に燃え立つような視線を投射しながら、長いこと受話器を置かずにいた。

「あなた、鼻毛、出ているわよ」

年増の女子職員が脇をすりぬげざま、言い置いていく。ついでに分厚い書類の束がどさつと投げ出される。風圧ではじき飛ばされた角封筒を、反射的に手ですくいとった。

〈管財課M様〉の宛名の下に、〈資料在中〉の朱筆がそえられている。Mはふたつの文字を見比べながら、それが記憶の底にからみつくのはなぜかといぶかった。

裏を返すと〈総務課S〉のサインがあり、これも筆跡は同じ。Mは丁寧に封を破りながら、はす向かいの机で伝票を繰っている妊婦服に声をかけた。

「総務課のSさんというのは、たしか係長だったよね」

「そうよ」

妊婦服が顔を上げるより早く、湿り気のある答が背後から返ってきた。振り返ると、今し方、鼻毛を注意していった中年女だった。

「たしか、ずんぐりして、色の浅黒い、釣り好きなの……」

「ちがうわよ。それはN課長よ。いやね、知らなかったの」

日ごろからMに謎の好意を示す女は、ブラウスの胸に分厚い書類の束を抱えていた。彼が固い背表紙の下でひしゃげる乳房を想像するのを待っていたかのように、女は胸の書類をゆっくりと回しはじめた。

「Sさんというのはね。背が高くて、いつも素敵なネクタイを締めてくる係長さんよ。ちょっと、あなたに雰囲気似た……庁内で知らない人なんていないの」

「ああ、例の、理系の大学院を出て市長に引っ張られて来たとかいう……」  
……つい最近も、一週間以上も家を空けたらしいわ。中年女は、話に乗ってこないMから妊婦服に乗り換える。そうなのよ、なんでも、浮気相手と一泊ウン万円もする温泉旅館に泊まっていたんだって。

角封筒を開くと、出てきたのは手書きの地図だった。海岸線が水平に横切る地図に稚拙なイラストがいくつか書かれ、そのうちサメらしきイラストに赤丸がついていた。寝入り鼻に見た夢の風景がたちまち浮かんだ。

でも、悪いことはできないものよねー。たまたま家族旅行中の広報課長に見られちゃったんですって。腕組んで歩いていたところを。女もいい度胸よね……。

「あらっ、どこへ」

同時に振り返った女たちがダチョウのように首を伸ばした。Mはもう走りだ

さんばかりで——。

「ちよつと、総務課まで……」

\*チヨウ鮫ジヨーズ

「おい、待てよ」

改札口を抜けたところで蛇のように這いよる声に足元をすくわれた。あやうく踏みとどまりながら首をめぐらせると、改札の巨大な黒い背が視野を占領している。訳がわからぬまま、吸い寄せられるように後もどりする。

「足りないよ」

駅員がハサミの先で、底の浅い木箱の中を示した。けげんな面持ちのまま覗き込むと、切符の山にぼつんと乗った一枚。

「だから、足りないって言ってたんだよ」

眩きを反復しつつ男の上体がゆっくりと反転する。その時になつてはじめて、最前からの黒い印象は男の冬服のせいなのだ気づいた。

このつだるような暑さに冬支度とは、なんとという狂態か。呆れながら、Mは少し腰をかがめて制帽の下の表情をさぐるうとした。しかしべったりと張り付いた影がそれを許さない。

「おかしいな……：F 駅からE 海岸駅までは、たしか最低運賃区間のはず……：」

混乱したMは、今にも上着のボタンをはじき飛ばしそつな太鼓腹に弱々しい抗議の声を投げた。

「ここはへ海洋パークだよ、へ海洋パーク。何を寝ほけているんだろっね、このお兄さんは……：」

駅員の嘲りに、ようやく状況を呑み込めた。寝過ごして降り立った駅の風景

が、目的駅と瓜二つだったのだ。どうやら昨夜の刺のある言葉の投げ合いが、まだ尾を曳いているらしい。Mは小さく首を振りながら、ズボンの尻ポケットに小銭をさぐった。

〈E海岸駅〉

ふと見上げた目に目的駅の四文字が飛び込んでくる。

「あっ？」

それを予期していたように、駅員が構内を水平に広がる笑いを笑った。むきだしにされた歯列に、Mは地図記号のひとつ、すなわちへちヨウ鮫ジヨーズを思い出す。

「ああ、これね……。まあ、このとぼけたお兄さんには、少し説明が必要だろうな」

駅員は改札の手すりに両肘を突き、たるんだ下腹をいっそう突き出した。そ

れからぼかんと口を開けたMを尻目に、しばし天を仰ぐ。

「さて、何から始めればよいのか。なにしろ状況はあまりに混沌としており、完璧に解きほぐすのは、勤続三十年、E高速鉄道の生き字引たるこの私をもつてしても容易ではない。性急な判断はかえって昏迷を深め……いや、いや、今は百の理屈よりは、ともかく始めることが……」

「では」という掛け声とともに、駅員はおもむろに演説を開始した。

「S海岸地方初の実用モノレール鉄道としてスタートしたわがE高速鉄道も、本年八月をもちまして、めでたく開業十五周年を迎え、身近な通勤、通学の足として、また行楽、レジャーの足として、ますます乗客の皆様にご親しまれております。加えて、この六月には、待望久しかったU駅までの延伸工事もようやく完成の運びとなり……」

どこかで聞いた長広舌だなと思いつながら、Mは改札口から橋上駅のコンコー

又、砂浜に続く海岸通りを過ぎて、最後に球形の海へと視線を移動させていった。地中海を思わせる観光ポスターの明るい青は、間違いなく〈E海岸駅〉からの視覚である。〈Ma子〉の部屋で想像したとおりの滑らかな海面には、白い積雲が二つ三つ、水際と平行に影を曳いていた。

「かようなきわめて複雑怪奇、横溝正史の探偵小説のごとき込み入った事情によりまして、ここ〈海洋パーク〉が〈E海岸駅〉に……：チヨチヨン

（と、演説の合間に、いつのまにかはさみの合の手がはいつている）、あべこべに〈E海岸駅〉が〈海洋パーク〉へとめでたく変更されたしだいでございます。チヨチヨン、チヨンチヨン……」

静かに眼差しを横切る綿菓子のうち、一個は確実に〈Ma子〉のトルソーだった。金色の産毛を光らせ、あくまでも広く豊かな背を向けていた夜明けの〈Ma子〉が、緩やかに滑り去る。



(いつまでも、いつまでも、いつまでも……)

立ち尽くすMの視線も、永遠にそのまろみを滑り落ちるのだろうか。

「おい、あんちゃん。文句があるならはつきり言えよ」

通りがかったチンピラ風の男が痩せた肩をそびやかせた。己の目付きに思い至らぬMは不思議なものを見るように見返す。

「なんだ、おまえ、これか？」

男はMの顔を斜めに見上げると、頭の横で人差し指をクルクル回した。なおもせせら笑いを浮かべて覗き込んでいたが、不意に顔を上げてブルつと身震いした。

この間も、駅員の長広舌はとどまるところを知らない。ついに痺れを切らしたMは、片手に握っていた硬貨を手すりに叩きつけた。鋭い金属音が駅員の舌を切り裂き、通りかかった若い女の爪先を床に縫い付ける。

「うっ、うっ、うっ……」

舌切雀の駅員は、短いうめきを漏らすばかりで、女の定期券を一瞥することさえできない。この時、不意に水平線の彼方から一条の光が射して、制帽の下の影を払った。浮かび上がった類人猿の額と、尖ったイカの顎にMは小心者の上司を発見する。

「気をつけるよ!」

二体の彫像を見比べていた男が捨てぜりふを残して立ち去った。

「馬鹿みたい!」

ついでに女も黒いスカートの裾を翻す。

「まっ、とにかくね、とにかく足りないんだから……払ってもらわないとね、規則なんだから……」

男の大演説は一転しどろもどろの哀願調になる。Mは釣銭箱に硬貨を投げ入

れながら、その顔を真正面に見据えた。小刻みに震える表情は今や猛魚から、ドブネズミのカリカチュアに変じている。

「文句があるなら……、文句があるなら、ね、わたしのよくな立場の弱い下っ端にではなく、駅長に言つて……、何と言つても責任者はあの人なんだから……、わたしはただ、あの人の演説を真似てみたかっただけで……それだけでこんなに馬鹿にされ……んで、こんな若造に……三十年間無遅刻無欠勤の……このわたしが……」

滴り落ちる汗に目をしばたきながら、駅員は際限なく言葉を垂れ流し続ける。「ところで聞くけど、水族館へはこの道を真っ直ぐだったよね」

Mは胸ポケットから取り出した地図を駅員の前に突き出す。体を反らせてじりじりと後ずさりしながら、駅員はなおも督促の言葉を吐き続ける。

「……払ってもらわないと一応……規則だから、わたしがきつ、決めたわ

けで……は……はない……ああっ！」

悲鳴とともに駅員の背丈が急に縮んだ。頭上はるかにあった制帽の鍔が今や眼下に。思わず足元を覗き込んだMはただちに理解した。駅員が踏台から落ちたのだ。ついでに肩パッドもはずれたのか、だらしなく着崩れた上着は今や黒いテルテル坊主だ。

——まあ、君がいかに巧みに変装したところで、今のわたしを脅かせるはずなどないのだが。

駅員の頭越しに見えるドアがゆっくりと開いた。Mはその陰から押し潰されたような体形が出現する前に、素早く踵を返す。あの如才ないひき蛙と押問答を繰り返す暇など、もはやないのだから……。

\*水先案内人

「君はそんなことで……仕事に対する責任感というものが……甘えるのもいい加減に……」

擦りガラスの課名に耳を当て、片手をドアノブに掛けて室内の怒声を聞いている。再度、声高な罵しり声がガラス越しに響く。次いで揺らめく影がスクリーンに広がり、Mははじかれたように飛びし去った。

「失礼！」

反動で細く開いたドアをすり抜け、Mより首一つ背の高い男が現れた。真一文字に結んだ唇、熱に浮かされたような眼差しがMを撃つて、疾く行き過ぎる。Mはドアに半身を差し込んだまま、広い肩を揺すつて去る男がその消失点に達するまで視線を置けなかった。

男の影を振り払うようにドアを引き開けたMは、異様な静寂に次の一步を踏みとどまる。縦に細長い事務室には二十名ほどの課員が机に向かっていたが、

聞こえるのは書類のめくれる音、電卓のキー音、ボールペンの走る音、パンチ音だけ。昆虫の羽音にも似た無機質な音の重なりに、次第に不安を募らせながら、Mはドアノブを後ろ手にしたままでいた。

電話のベル音が重苦しい空気を引き裂くと、それが合図のように一斉にささやき声が沸き起こった。机の近い者同士がひと組になり、齧歯類の目を配りながら、狭い額や尖った鼻を寄せ合う。ようやく呪縛を解かれたMも、並びの末端に位置する机に向かって、おぼつかない足取りを開始した。

栗色の髪の女が机に覆いかぶさるようにしてペンを走らせている。その背後に回ったMは細い肩に細かい震えが走るのをいぶかりながら、肩越しに声を投げた。一瞬震えはとまったが、前傾姿勢は変わらない。

Mは同じ言葉と同じ抑揚で繰り返す。弾かれたように顔を上げた事務員の目は兎のように赤い。そこから大粒の涙が溢れ出していた。

「はいっ………S係長ですか、あの………あの………係長は、係長は………たつた今、お辞めになりました！」

ふり絞るように叫ぶと、書類を四方にはね散らして突つ伏し、あたりはばかりぬ泣き声に身を委ねる。Mは地図のコピーを握りしめながら、しゃくり上げる女の背を呆然と見下ろすばかりだった。

「あのな、例の伝票、早く会計に回してくれないと困るんだよ。また、催促が来ているぞ。それに次回の県下総務課長会議の通知もまだだろう………」

どす黒い顔をした短軀の中年男が窓を背に立ち上がり、甲高い声で課員を叱咤し始める。Mはまだ肩を震わせている女を慰めたい誘惑に耐えながら、風船玉のような言葉を部屋の奥に押し出した。

「やはり、やめましたか………やはり………」

\*揺れるダリ風電話

水族館の正面ホールに足を踏み入れたMは、階段の中頃から耳についていた澄明な金属音の正体を知った。広々としたフロアの真ん中に奇抜なデザインの受話器が置かれ、そこから冴えた高音が四方に広がっていたのである。

Mはひと気のない丸天井の下を直線的によぎろうとした。その行く手を遮るように、鈍い銀色に光る器械が、超現実的な姿形を浮かび上がらせる。

材質は不明だが、おそらくある種の金属に非常に高熱を加えて引き伸ばし、最後に弧状に曲げて冷やしたのだろう。中央が今にも折れそうにくびれ、全体に一八〇度捻じれている。それが人骨を組み合わせたような支持架の上で、精妙なバランスを保持している。

接近するにつれて器械は微妙な反応を見せる。一步ごとに長いアーチを揺らめかせながら回天する様は、まるでカルダーの動く彫刻のようだ。



銀色のモビールはMが達するまでに、正確に三六〇度回転した。置台は高さ一メートル弱の円筒で、受話器と同じ同白銀色に輝いていた。

涼やかな音は丸天井の内部を隈なく巡り、やがて半球の外へ静かに滲み出して行く。Mは指先を器械の上に広げたまま、雲間のざわめきに共鳴する不思議な音楽にしばし聞き入っていた。

——しかし、ここに来てまでなぜ私は同一の姿態を反復しなければならない。私は一体何を待ち受けているのだろうか。

出札所の奥に黒い影を認めたMは、それが動かないのを確認してから、指先をそつと器械に落とした。取り上げた銀色のアーチは魔法のように弧を強め、自ずと耳と口に吸いつく。思わず腕を伸ばして遠ざけると、すつと元の形に戻る。何度か不思議なゲームを繰り返したあげく意を決して耳に当てると、その奥は発信音さえない空白の領域だった。コードを弄ぼうとした指先が空を切る。

天井から漏れる乳白光に目を細めながら、彼はいつまでも受話器を置けなかった。

「大人一枚お願いします」

出札所の影は何度目かの呼びかけに、驚いたように顔を起こした。Mはその激しい動作に、首筋をたがえなかつたかと危ぶむ。

「すみません。わたしちよっと、あれしていたもので……」

前髪をピンクに染め、同色の唇を尖らせる女は、これから会見するお魚たちの接客ぶりを危惧させる。

——遠来の客を迎えながら、やつらが牙を剥くのはわかっているのさ。だが、そんなものはあのチヨウ鮫駅員と同じで少しも恐れるに足りぬ。ただ私が恐れるのは……。

「えーと、大人一枚でしたね」

女は机に散乱する女性週刊誌をかきわけ、抽斗を上から順に開けて、ようやく入場券の束を捜し当てた。

「入場券には、水族館のみのものと、マリリンランドと海獣博物館がセットになった共通券とがありまして、全部ご覧になるなら、こちらがお得ですね」

Mは仕切りガラスに額を当てるようにして、抑揚を欠いた声を背後に滑らせている。今、彼が注視しているのは、陽に焼けた一枚の張り紙。

〈海中展望台は当分の間閉鎖とさせていただきます。なお、水族館とマリリンランド、海獣博物館は引き続き平常通り営業させていただきます〉

「おかしいな。展望台は昨日から再開したと聞いたけれど。昼過ぎに電話を入れた時には確かにそういう返事だったよ」

女は紙幣を抽斗にしまいながら、「はい、昨日から再開していますが」と言つて、呆けたような顔を向けた。

「でも、その張り紙には……」と、示したはずの指先があてどなく壁面をさまよい始める。いつのまにかおびただしい張紙が出現し、今読んだばかりの文字を蔽い隠してしまったのだ。幾重にも折り重なる赤茶けた模造紙、黄ばんだ板目紙、煤けたアート紙……。記号の大氾濫を前に、指先は際限のないブラウン運動を曳くばかりである。

——私が恐れていたのはこれ——ゴールを前にしてのこの無用の混乱なのだ……。やはり日曜日まで待つて、装備に万全を期すべきだったのだろうか。

「では、共通券一枚ですね」

戸惑うMの前に女が硬貨を六枚横並べにした。

自分はいつ共通券と言ったのだろうか。言ったような気もするし、言っていないような気もする。まあ、どちらでもよいか。ここはこの女の指示に従うのが正解のようだ。

「ところで、飼育係のSさんは出勤されています？ 月曜日以外は、こちらだと」

「Sさんなら、今朝からずっと研究所ですよ。バンドウイルカの「ママ」ちゃん」  
がヒキツケを起こしたとかで……、ただ、そろそろ戻ってきてもいい頃ですけどね……」

女は空と海の狭間を見透かすように眉根を寄せた。Mも同じ仕草を重ねる。入口のつくる楕円の額縁に紺碧の空とオレンジ色の稜線を持つ積雲が嵌り、さながらシユルレアリスム絵画のよう。となれば、雲のかわりにねじりパンとSの捻じれた長身が浮かんでいても不思議ではないことになる。

「あつ、そうか！ あなたSさんのお知り合いね」  
振り向いた女が歓声を上げる。

「まあ、そんなところかな……」

女の眼に不意に青白い光が宿り、頬にはうつすら赤味が差す。その横顔をまぶしげに見やりながら、Mは曖昧なほほえみを返した。

唇をすぼめた女が長い息を吸い込んだ。

「では帰るまでの間、お魚さんたちを観察させてもらうとするか。ここまでくればもう、何も焦らずともよいのだから……」

Mはイルカのジャンプが描かれた入場券を手に出札所を離れた。歩み去るその背を追って弾力のある声があると伸びる。

「ねえ、わたしSさんの手紙を預かっているんですよ」

\* 日の丸イルカ

「どうだね、例の書類はもう見つかったかね？」

額に当たったハンドタオルをせわしなく動かしながら、課長が日常会話風に切

り出した。へ本日のサービスコーヒーがその分厚い唇に吸い込まれた後のことである。Mはカップの把手を握ったまま、テーブル上に広がる腸詰のような太い指とヤニに染まった四角い指に視線を落としている。

「昨日の幹部会議のあとなんだが、企画課長と総務課長から相談されてね。両課長が口を揃えて言うには、実は君の課の職員のことですべて困っていることがある——と、まあ、こうなんだよ」

甲状腺機能に障害があるのか、課長の眼球はかなり前方にせり出している。そのひき蛙の眼球がゆっくり回りながら、時折、Mの表情を探るように動きを止める。

「で、よく聞いてみれば、君のことではないか。それで、驚いてしまつてねえ  
「……………」

語尾を引つ張り上げながら、小さく首をすくめる。自称エリート課長、海外

研修唯一の成果と噂されるご自慢のポーズも、Mの黙殺にあつて行き場を失う。「で、企画課長が言うには、先日送付した書類を早く返せと催促してくる職員がいる。管財係のMというから君の課の職員だろう。だが自分はそんな書類を受け取った覚えはないし、課員に聞いても誰一人知らない。それで返答に窮している。君から何とか、その職員に説明してやってくれないか、と……まあ、言ってみればこうなんだよ」

うん、と自ら返事を足した課長が、コップの水を喉に流し込んだ。店の奥から緩やかな旋律が流れ出して、連続的なリズムに絡んだ。Mは次第にテンポを速めるフレーズに聴覚を集中させていく。

——タイトルは何と言ったか。このギターとシタールの精妙なコラボを私は忘れてはならないはず……。

「うちの課の者が確かに送ったと主張しているのなら、その言葉を信じてやり



たい。そう言つてやつたんだが、何分、あちらさんも強硬でね。決して君を疑つたり、ケチをつけたりしたいわけではないからね……」

課長はそこまで言うつと急に声を落とすし、不安げな眼差しを店内に配つた。他にはカウンターの裏でデッキを操作する若い店員がいるだけだが、課長の声はあたりをはばかりようにさらに小さくなる。

「ところで、君が送つたという書類なんだが、どういう内容だつたんだね。私も決裁しておきながら、すっかり失念してしまつてね。まあ、君も知つての通り、このところの書類の増加ぶりは凄まじいものがあるから。とても全部に目を通すことなど……えっ？」

「簡単な紹介文書ですから、決裁はいただいていません」

「あつ、そう。そうだろうな、うん、そうだろう、うん、うん」

急に相好を崩した課長は、紫煙を長く吐き出しながら何度も頷いた。店内に

は相変わらず、遠い記憶を揺さぶるようなメロディーが流れている。Mは、喉仏の所在もわからぬ太い首を眺めながら、何か奥深いものが収束される予感に耐えていた。

「ところで、そもそも君とS係長はどういう関係だったんだね」

庁内食堂のランチメニューの臭気がまともに襲ってきた。思わず顔をそむけながら、悠遠なサクスの響きにおぼろげな言葉を載せる。

「どうと言って、別に……」

「というのも、これは今朝方、総務課長から聞いたんだが……」

課長は上瞼を小刻みに震わせながら、再度声をひそめた。その途端、ドガドガドガッ、という凶暴な打楽器のリズムが大音量で飛び出してきた。

「あっ、あ——やめて、やめてくれよ——っ！」

体の前で両腕をプロペラのように振り回した課長が、瀕死のカナリヤの悲鳴

を上げた。両耳を塞ぎ、首を左右に打ち振る動きを伝達して、テーブルの茶器やスプーンがカチャカチャ鳴る。Mは自分のカップと受皿を冷静に持ち上げて、上司の狂態をあきれたように見下ろしていた。

音は始まった時と同じように唐突に止んだ。

「すいませんねえ、このところアンプの調子がどうもおかしくて」

鼻下に髭をたくわえたマスターが、頭をかきながらカウンターの下から顔を出した。

「時々、ポリユームのコントロールが利かなくなるんですよ。やっぱり寿命かな……」

課長は目をしばたかせると、金魚のように二、三度口をパクパクさせ、それから血の気の失せた顔を向けた。

「大きな音はどうも、ね、苦手なんだよ。若い頃から心臓がね、左室心筋が委

縮して、冠状動脈がね……つまり、その……いや」

額の脂汗を拭いながら、胸ポケットから取り出した錠剤を口に含む。

「どこまで話したかな？　そうか、S係長の件だったな。……実はS係長が昨日辞表を提出した……いや、まだ正式に受理されたわけではないが、ともかくそんなことがあったんだ」

何かに取りつかれた眼が、脳裏に鮮やかに甦る。

「で、総務課長はこう言うんだよ。退職の理由は君の書類にあるのではないかとね。もちろんわたしは一笑に付してやったよ。彼の退職理由を知らない者など庁内にはいないからな」

昨日、総務課の入口でその眼に出会ったとき、もはや組織に属していない人間のものだと直感した。だからこそ兎眠の女の報告も冷静に受け止められたのだ。むしろシヨックだったのは、水先案内人と自分との類似に今まで気づかなか

かったおのれの迂闊さだった。

「ともかく、係長が書類の件をずいぶんと気にしていたのは確からしい」

「そうですね……」

相変わらずの虚ろな返事に拍子抜けしたのか、課長は天井を見上げて太い紫煙を連続的に吐き出した。

「何をそんなにこだわっているんだね？」

「えっ？」

口調は平静だが、Mはその口が笑うように引きつったのを見逃さなかった。

「決裁も取らない照会文書などに、なぜそれほどこだわるのか、その理由が今ひとつ分からないんだよ」

「別にこだわってなんかいませんよ。ただ……」

「ただ、何だね」

「ただ、ただ……」と頭の中で呟きながら、課長の肩越しに伸ばした視線がメニューの脇のポスターに行き当たる。水上を舞う白いイルカ、衛星軌道から眺めた地球弧、マジックハンド付海底作業船、NASAの宇宙服に身を包んだ潜水士などがモンタージュされた六〇年代ポップの残骸は、来年、隣市で開催される海洋博の宣伝ポスターだった。

上から四分の一あたりに、大きくへいま宇宙から海洋へ」の標語が並び、すぐ下に「宇宙技術を、無限の資源宝庫へ」の文字が続く。イルカのボディに描かれた日の丸に苦笑したMは、Sの地図にも同じ記号がはねていたのを憶い出す。

——そうだ、今度の日曜日、へMa子」がヨガ道場に行くというなら、オレは水族館に行くことにしよう。（そろそろ次の仕事にかかるべきだと思うがね）もちろん、あの地図と、ボーナスで買った6×4・5判カメラ、月刊「アクアラ

「イフ」最新号と小型カセットレコーダーを忘れずに……、（いつまでも、それほど重要でない……）そして今度こそ深海探査の第一歩を踏み出すのだ。（こんなことでは課全体の損失だと……）。

「では、これで書類の件は一件落着いたと。まあ、君は根が真面目だから、余り考えすぎないように、な。近いうち、例の焼鳥屋でじっくりやろう」

部下の沈黙にしばれを切らした課長は、盃を乾す仕草とともに席を立った。  
「いつまでも、そんなことを言っている！」

不意の怒声を食らった課長の巨尻が、椅子を揺るがして舞い戻る。部下の激しい怒りの標的が自分だとはどうしても信じられないのだろう。見当違いの方向に指先を這わせて、空のコーヒーカップを引き寄せようとする。

「ああ、こちらにいらしたんですか。随分探したんですよ。二号館までグルッと回って……。」

度の強い黒縁眼鏡を光らせた男が、特徴的な顎を扉の影から突き出した。それを見た途端、課長は水をかけられたブルドックのように飛び上がり、両手を大きく広げて係長に駆け寄って行った。

「おおつ、来たか。ちようどよかつたよ、君に話があつたんだ。少し外へ出よう。そうだ、この前開店したばかりのスバゲッティのうまい、あそこがい  
い……」

薄い肩を押して、課長はそそくさと店を出て行った。レジの前ではコーヒー代にしては大きすぎる紙幣をかざした髭男が苦笑いを浮かべていた。Mが凍り付いた頬を溶かして笑いかけると、晴れやかな笑顔に変わった。背後では相変わらず、昼下がりの海を思わせる緩やかなギターの調べが鳴っている。

——宇宙工学の成果を今、海洋開発に、か……至言だな。これから私が行う探査が、つまりはそうした転換なのだから。



「課長、課長、どうなさったんですか！ 顔色が……」

「心臓が、心……臓が……」

店外の騒ぎも、意を決して席を立ったMの耳には届かない。音楽が再びサツクスソロに転じた時、Mはそれが〈Ma子〉の誕生日に贈ったレコードの一曲目だったことを思い出していた。

#### \* 広角レンズ

薄汚れた水槽の底に黒い毬状の物体が蹲っている。四方に突き出した鋭い棘に、初め自身の澱が凝固したものかと疑った。しかし水底の孤独な生物と対峙するうちに、自分こそがこの棘皮生物の排泄物ではないかと思えてきた。沈黙を守る堅固な生物に引き換え、おのれの泡のような存在感に思い当たったからである。

——とすれば、この棘玉は、昨夜〈Ma子〉の股間に張り付いていたあの生物の同類なのではないか。ひし形に開いた下肢の中心に鋭い亀裂が走った時、私はそれほど深くまでどうやって沈もうかと思案に暮れてしまったのだろうか……。

〈これでは、腰にウエイトの二つ三つでも巻かなければ、どうにも、な……〉  
尖った二つの山に手を置いて、Mはひとり微笑んだものだった。

「ねえ、まじめにしないで駄目よ」

〈Ma子〉がカールさせた睫毛を上げ、頬をいっばいに膨らませて抗議する。両膝の間からMの乳首をつねろうとする手を払いのけて、ついに谷あい深く潜航すべく息を吸い込み……。

「おい、余り首を振るなよ！」

叱声に振り返ると、一人の中年男が〈棘玉〉と反対の水槽に向かつて立って

いる。その後ろ姿に、初めヒキガエルの課長がこんなところまで出張ってきたのかと驚いた。頭頂部がまばらになった髪、袖口の綻びた開襟シャツに薄鼠色の半ズボンを除けば、体形、声、話しぶりまで、あの自信家と瓜二つだったからである。Mは水槽の前を力二歩きで移動しながら、男の表情を視界の隅にとらえようとした。

「その三番目、もう少し右に寄れ」

男と水槽の間には、骨太の三脚が堅固なピラミッドをつくり、その頂点には大判カメラが水槽を睨んで漆黒の輝きを見せている。胴の下から男の手へとくねる銀色のケーブルは、何か工口チツクな図案を描き出しているようだ。

「よし、それでいい。そのまま絶対に動くなよ、絶対に……」

こぶしが高々と掲げられると、上腕には二個の鶏卵が盛り上がった。男はそのままあらゆる動きを止めた。

Mは股から脛の筋肉が強張り、歩行がまったく困難になっているのに気づいた。緊張が耐えがたく高まり、遂に破局に至るかと思われた刹那、男の指先がパツと開いた。戒めを解かれた銀色の蛇が床に落ちて長々と這う。

「駄目だ、だめだめ！ 何度言えばわかるんだらうね。まったく、本当に阿呆だね、君たちは……」

男はケーブルををまたいで素早くカメラの背後に回った。能役者を思わせる隙のない動作に、ひき蛙との類似などはとうに失念している。

「ぼくに、なにか御用？」

両手を腰に当てたまま男が不意に振り返った。その鋭いまなざしに吸い寄せられるように二三歩踏み出したMは、とりとめのない言葉を紡ぎ出す。

「これはたしかスウェーデン製のカメラをモデルに国産化されたんですよね。ぼくも前々からほしいと思っていましたんですけど……なにしろ、高価でしょ。

なかなか手を出せなくて……」

「そうかね」

カメラマンはぶしつけな質問者を見据えて、低くなじるように言った。言葉が継げないMは、ただひきつった笑いを浮かべるだけ。

「今日はもうやめだ。君たちがそのように非協力的なまがきり、いくら時間をかけても無駄だからね」

男はガラスの奥で不満げに胸臍を振る者たちに尻を向け、足元のレンズやフード、ブラシなどをそそくさと片付け始めた。

そうか——、と、ここで初めて気づいた。このモデルたちこそ、ほかならぬへちヨウ鮫シヨーズだったのか。どうりで足が貼りついたわけだ。

Mは男に背を向けて、胸ポケットから取り出した紙切れをおもむろに広げる。Sの第二信も第一信同様、子供のいたずら書きまがいの地図だった。ただ今回

はその記号の中心が水族館（チヨウ鮫マーク）から、沖合のE島（イルカマーク）に移動していた。

ともあれ、ここまで正しいコースを歩んでいるのは間違いない。Mは、地図を持つ指先がかすかに震えるのをおぼえていた。

「おまえたちはおそらく、この八〇ミリ標準レンズよりも、広角レンズのほうがお気に入りだと言いたいのだろうな。それも当たり前の四〇ミリや五〇ミリではなく、二〇ミリや二五ミリといった特注の超広角が……」

低く歌うような声に振り返ると、トランク片手に三脚を担いだカメラマンが立ち去るところだった。

「でも、その長大なパースペクティブこそが、おまえたちに精神の方向性を見失わせ、ますますゴールから遠ざけるのだということを忘れてはならないよ」

Mはあわてて男を追いかけた。

「実はそのことで、どうしてもお聞きしたいことが……」

\*アベック半魚人のデモ

カフエテラスのほぼ中央に陣取って、テーブルに広げた地図に見入っている。海が程近いせいか、時折砂粒まじりの風が吹きつけるが、両肘を文鎮変わりにして没頭している。

——イルカやチヨウ鯨はいいとして、海岸からS湾、そして海洋研究所のあるE島まで点在するこの魚類とも爬虫類ともつかぬ生物は何なのか？ 初めて見た時にはすべての意味を了解したと思ったのに、今はただのいたずら書きに見えない……。

Mはしきりに首を傾げながら、地図上の奇妙な絵を指でなぞっていく。その指先を不意に黒い影が襲った。顔を上げるとひと気のない海岸通りを背景に

〈Ma子〉の丸い輪郭が浮いている。両頬と鼻先に張り付いた日焼けが、愛玩用の熱帯魚に似た童顔をさらに幼くみせている。

「どうしたんだよ、その目？」

Mはその両眼も日焼けしたように赤いのに気づいた。

「ちよっと、塩水にやられたみたい。午後から退社して、海岸で水遊びしていたから」

〈Ma子〉は幼子のように両目をこすりながら向かいの席に腰を下ろした。Mはその細い首にいつか買いたタオルが巻かれているのを認める。すべてに年相応を主張する〈Ma子〉が、白地に赤い太陽という子供じみた絵柄を好む理由が今一つ理解できない。シャワーのあとに必ずそのお陽様が腋に隠れるまでぎゅっと巻しめて、化粧品CMのモデルのように微笑むわけも。

店の奥から飛んできたウェイターに注文を告げると、〈Ma子〉は指先を瞼の



上に立ててぐいぐい押し始めた。その隙をついて、テーブルの地図を素早く折り畳む。

「何の地図？」

指を深々と突き立てたままへM a子へが問いただす。海蛇の毒を含んだその言葉をあやうくかわして、

「今日の日曜日、二人でアパートを探しに行く予定だっただろう。君が海の近くがいいって言っていたから、その地図だよ」

Mは名刺大に畳んだ地図を儀式めいた手付きで封筒に戻した。それを横目に長いあくびを漏らしたへM a子へは最後に短い叫びを上げる。次いでビニールバッグの底を掻き回すと、取り出した手帳を猛烈なスピードで繰り始めた。

「やっぱり、そうだった。ちよっと待っていて」

手帳をかざしながらへM a子へは石畳の上を飛んでいく。白いワンピースが

妖精のように舞うのに感心しながら、それが扉の陰に隠れるまで見送った。

入れ違いにトレイを持ったウェイターがあらわれる。

Mはシヨルダーバッグから大判の雑誌を取り出すと、お目当ての連載エッセーを目次で拾った。タイトルは『資源と終末の海洋生物たち』。遺伝子工学や精神分析の用語が頻出するその難解な文章に、Mは己の眼差し——すなわち待ち続けているもの——の正体を探るつもりなのだ。

読解に没頭してどのくらい経っただろうか、どこからか濡れ雑巾で床を叩くような音が聞こえてきた。眼を上げると、向かいのドーナツ店の前を二人連れのダイバーが行き過ぎようとしている。一人は長身の男で、細身の体を銀色のスーツに包み、小型タンクを背負って少し前屈みに歩いている。歩きたびに足元の巨大なパワーフィンがバタンバタンと音を立てる。

もう一人は髪の短い女で、深い碧色のスーツの背には、タンクの代わりに二

枚の透き通るような背びれを張り出させていた。それが海風を受けて扇のように優しく揺らめいている。足はピンクの素足である。

Mは二人の動きを追いながら、テーブルに置かれた飲み物にストローを突き刺した。遠くから眺めていたウェイターが、別の一人と顔を見合わせて笑った。女は防塵マスクのような器具で口を覆い、男は頭上遥かに伸びたスノーケルをくわえている。彼らがサーフショップの前に差し掛かった時、突如その先から水が噴き出して、空に鮮やかな虹をかけた。歩道に水を撒いていた海水パンツの男が驚いてホースを取り落とした瞬間、今度は女の両耳から水が水平に飛び出す。

「うわっ、ごほほっ、ほっ、ほ……」

ついでにMも、ストローの先から茶色の液体を吹き出した。その間もダイバーたちは一定の歩調を崩さず、海に続く石畳を風の来る方向に歩み去った。折

れ曲がったストローをくわえたまま、Mは二人が消えたあたりを長いこと眺めていた。

「ごめんなさい。電話がなかなか通じなくて。あの電話いつもおかしいのよね。突然、ピユウピユウ、風のような音が聞こえたり、知らない男の人の声が聞こえたり……」

駆け戻ったへMa子へが弁解する。Mは最近切った恋人の髪が再度水をかぶったように濡れているのに気づく。

「その髪は……?」

「あっ、ひどい！ わたしのアイスコーヒー飲んでしまったのね」

Mの質問とへMa子へが口を尖らせるのとは、ほぼ同時だった。本当にあな たって、いつも……と並べる相手に上の空で謝罪しながら、Mはいっそう赤味を増した眼と、周囲に新しくできた濃い赤痣に気を取られている。何かに余

程強く圧迫されたのだろう。深く窪んだ跡が外堀のように取り囲んでいる。

「もう、いいわよ」

そっぽを向く恋人のために、あわてて代わりの飲み物を注文する。

「例えば〈Ma子〉が、自分が作った書類を他の部署に送ったとするね。で、それが途中で消失してしまった場合に……」

「うちの会社では、そんなお役所のようなことはありませんから」

ピシヤリと言い放つ〈Ma子〉。心安らくひとときをもちたらずはすの会話が、今日に限っては二人の間の微妙なずれを助長するだけのようだ。

「そうだな。あれほど簡明な照会文書が、総務課、人事課、企画課、また総務課、人事課、企画課、X課、Y課……とたらい回しされた拳句、文書ネットワークの隙間に忽然と消失してしまったのだから、お役所仕事以外の何物でもないな」と、ことさらおどけた口調で結ぶ。

そして残された唯一の手がかりも、あの憑かれた眼とともに消えかけていると考えたと途端、激しく急かされているような感覚が襲ってきた。すぐにでも水先案内人を訪ねて、深海調査の途につかねばという焦燥感にほとんど席を蹴りかける。

——深海調査だと？ 何を言っているのだ。私の次の行動は紛失した書類の捜索に決まっているではないか。そのためにこそ苦勞してSの再就職先を突き止めたのだろう。水族館に出かけ、元F市役所総務部総務課総務係長Sに会って、照会文書の行方を聞き出す。……それから、それから……どうする？

「あなただいじょうぶ？ 今、とても怖い眼をしていたわよ。いつもわたしが注意している変な眼付きとも違う……とても怖い」

心底恐怖を感じたのか、(Ma子)は二、三度激しく身を震わせた。

「いや、ちよっと仕事の考え事をしていただけだよ」

Mは笑いながら首を振る。

「それより、〈Ma子〉が席を離れている間に奇妙なダイバーを見かけたよ。若い二人連れだね。男の方は宇宙服まがいのスーツだし、女と言えば、五〇年代の怪奇映画に出てきそうな半魚人服だったんだ。最近はあるあいうのが流行りなのかな」

「まさか。多分、CMの撮影かなんかでしょ」

相変わらず横を向いたまま、しかしその口調には冷静さが戻ってきている。「それとも案外、本物の半魚人だったのかしら。最新の遺伝子工学によれば、人間の遺伝子にお魚や動物の遺伝子を切り貼りして、半魚人でも半獣人でも自由に作り出せるというから。もちろんその逆にお魚の遺伝子にいたずらして、可愛い人魚姫も作れるわけだけど」

そう言って〈Ma子〉は、今日初めて見せる心からの笑いを浮かべた。

「遺伝子工学だって？」

一瞬、耳を疑った。常日頃Mが賞賛してやまない靈感的な唇から、このような科学用語が飛び出そうとは。つきあい始めた頃は、わたし女子大で国文学専攻だったから、科学は苦手。数式など聞くだけで鳥肌が立つと言っていたではないか。

「馬鹿にしないでね。こう見えてわたし、テレビの科学ドキュメンタリーのファンなのよ。『失われた野生動物たち』とか、『ここまで来たロボット工学』とかね。K社の科学解説シリーズなども時々読むし」

言われてみれば〈Ma子〉の会話に科学用語が登場するのはこれが初めてではないと思いが当たる。クローン人間、DNA、分子生物学、ダーウィニズム……細胞分裂の意味さえ知らなかった〈Ma子〉が、僅かの間に遺伝子工学を論じる科学者に変じていたとは……。毎日のように会いながら、なぜ



今の今まで気づかなかったのか？

「ねえ、わたし、何も食べてないのよ、お昼から」

「だったら、久しぶりにへエル」の特製ステーキと行こうか」

嬉しい——と、舞い上がる恋人を見やりながら、格別急ぐ旅でもないと自分に言い聞かせる。書類の行方さえ突き止めさえすれば、すべてが判明するはずだから。そう、多分、へMa子」が現代のキュリー夫人に変貌した理由も。

「マスターったら、相変わらずあの気障なチヨッキなのかしらね」

「あれを取ったらマスターではなくなるよ」と答えながら、伝票をつかんで立ち上がる。

「ボトルの期限は切れてなかった？」

抜け目なく腕を組んでくる恋人の屈託のない笑顔と、その中心で解読を待つ赤痣に意識を奪われながら、Mは暮れかけたテラスを早足で渡り始めた。その

耳元を（Ma子）の湿った唇が襲う。

「わたしたち、いつ結婚できるのかしらね」

\*パネル写真のカメレオン人間

「業務連絡、飼育係のSさん、事務室までお戻りください。繰り返します……」  
若い女の甘い声が館内に流れ、二人の男が同時に足を止める。カメラマンはトランクを通路の脇に置くと、巨体を波打たせるようにして走り出した。通路の奥を見透かしていたMも同じ歩調で追う。

「ああ、あなた……Sさんが戻りましたから」

サンダルを鳴らして駆けてきた女がはすむ息の下から告げた。Mは示された方向がカメラマンと逆なのに一瞬とまどうが、次には赤いエナメルの踵についている。

「ここには専属のカメラマンがいるんですか？」

「君たちがそのような非協力的な態度を取る限り、いくら時間をかけても無駄だからねえー」

女は急に立ち止まると、腰に手を当てて男の口ぶりを真似た。それから白いワンピースの胸をよじって笑いを爆発させた。

「Sさんですよ。いつもSさんに付きまとい、迷惑がられているんですよ」  
そこまで言うともた何か思い出したのか、いっそう高い笑いに身を委ねた。  
Mはカメラマンと飼育係が同姓だったと知って驚く。自分が知るただ一人のSがこんなところで奇跡的な符合を果たしていたとは……。

「Sって、変わった姓だね」

「そうですね。……あつ、そこは！」

女が扉を開けようとしたMの手をあわてて押さえた。だが時すでに遅く、ド

アは半分ほど開いてしまった。奥はコンクリート壁に囲まれた小部屋だった。剥き出しの天井から吊るされていたのは奇怪な形状のウェットスーツ。背中と手足の部分に鱗状の突起があり、表面は銀色に光る小片に埋め尽くされていた。その巨大なシーラカンスの死骸が奥まで続いていた。

「そこは倉庫ですよ。事務所はこちら」

はず向かいのドアを開けながら、女は無作法な客をたしなめる女主人の口ぶりになった。Mは憤慨の余り、館内に響き渡るような音を立てて扉を閉めた。せつかくの決意を半魚人映画などにすり替えられては、本当にゴールを見失いかねないと危惧したのである。私は今度こそ本気なのだから。

「ここは半魚人まで飼育しているんだね」

狭い事務室を見回して皮肉な口調になる。壁の写真に、今見たばかりのスーツを着けた男が収まっていたからである。筋張った手で海底の岩にしがみつ

男の姿は、どう見ても怪奇映画のパロディだった。

「変でしょ。全部、館長の趣味なのよ。……あつ、お掛けになって下さい」  
女は黒いレザーが擦り切れたソファアを示して、隣室に消えた。

写真の男は推定年齢三十歳ぐらい。日焼けしすぎたような腫れぼったい顔。  
どんより濁ったその眼にMは孤独なカメレオンの眼を重ねた。

〈遺伝子工学の偉大な成果を記念して——館長〉

パネルの下部にはこんな文句が墨痕鮮やかに記されていた。ポットを提げてきた女がMの背後に回って、サイドテーブルの脇に立つ。

Mはその口元に浮かんだ微笑を見損なった。

「ところで、ホール中央のあの電話器だけれど、変だね。勝手に耳と口に吸い付いてくるし、薄気味悪いつたら。あれも館長さんの趣味なの？」

「あらっ、またですか？ ついこの間も電話機のコードがない、と怒鳴り込ん

できた人がいたんですけど、そんなこと言っても、もともとあそこに電話なんかいないんだから」

Mはゴール目前ですぐに横滑りする旅にうんざりして、ため息とも笑いともつかぬ息を吐きだした。

女はMに背を向けて半魚人写真をまじまじと眺めている。

「あなた、Sさんとはどういうお知り合い？」

「趣味の仲間といったところかな」

「写真の……？」と、首を傾げながら、なおもパネルの前を離れない。

「でも、Sさんも面白い方ですね。昼はお役所勤め、夜は水族館の飼育係なんです、誰も想像しないですよ。奥さんもてつきり浮気だと信じていたらしいですよ」

「そうらしいな」

——A温泉の最高級ホテルで逢瀬を重ねていた、か。確かに君たちの期待通りには違いないが。密会相手はもつとスキヤングラスな代物だったわけだ。

「あつ、わかった！」

女が甲高い声を上げた。

「あなた、弟さんなんでしょう。建築設計のお仕事をしている……ねつ、それでしょ」

振り向いた顔がようやく秘密を探り当てた喜びに輝いている。

「どうして？」

思いがけない言葉にMは絶句する。

「だってあなたSさんに瓜二つだもの。嘘だと思ったらこの写真を見て御覧なさいな。ほらつ、頭から顎のかたち、それに鼻まで……。でも、Sさんもいやね。あとで友達が訪ねてくるからなんて」

——このカメレオン人間がSだった？ 私がその弟……。何ともまあ、奇想天外な話をでっち上げたものだ。少々作家的才能に恵まれすぎたのではないか、このお嬢さんは。

Mは皮肉な笑いを浮かべるが、それが途中で凍りついてしまう。あの時のSの表情から熱っぽい瞳と真一文字の唇を引けば……。

「お兄さんは大学院生の頃から館長さんとこの研究を続けていたそうよ。もつと若い時の写真もあるわ。えーと、たしか……。」

MはSと水族館の浅からぬ因縁を知った。彼が退職から間を置かずに、隣市の水族館に就職したと知った時には、その関係がどうしても理解できなかったのだが……。

へりりーん、りりー……」

どこからか耳慣れたベル音が聞こえてきた。



「あららっ、やだ。館長さん、いないのかしら」

首を巡らせた女は、退室前に開いたアルバムを投げ出していった。黒い台紙には広いプールを遊弋する半魚人の写真が整然と貼られていた。体形、顔立ちとも壁の半魚人に似ているようだが、同一人物かどうかは判然としない。Mは湿気を吸って重くなったアルバムを引き寄せ、大急ぎでページを繰り始めた。

次のページにもバンドウイルカと並んで泳ぐ半魚人。両側に立つ波の形からその遊泳速度は優に人間の限界を超えていると推測された。

——何か特殊な推進器官でも備えているのだろうか？

次の写真では両脇に扇のような鰭を持つ女半魚人が子イルカとジャンプを競っていた。写真が暗いのと、顔半分を覆うマスクとで年齢は定かではないが、体形からは若い女性のようなようだ。長い髪を海藻のようになびかせて、男と二人で水中車輪を演じているスナップもあった。

「今、お兄さんからで、マコちゃんの容体が心配なので研究所へ戻るといこうとです」と、女が扉から首だけ出して告げた。

「で、悪いけどまた出直してくださいって。ふふふつ……、まだとぼけているのよ。あなたのこと、彼だなんて」

またしても直前で空振りかという怒りと、毎度のことさ、という諦めが交錯する。

「今から船着場に急げば、帰りの最終便に間に合うかもしれないけれど……」  
無駄足を踏ませたことに同情したか、女が掛け時計をチラツと見上げて呟いた。

「いや、今日はもうやめておこう」

Mは飛び上がるようにして立ち上がった。まだ首から下を扉の陰に差し入れたまま、女が擽ったような笑顔を浮かべる。

「せっかく訪ねて来ていただいたのに、悪かったですね。お宅遠いんでしょう。たしかY市のはずれでしたね……」

女は依然として「M」の弟に説に固執しているようだ。

「違うよ、隣のK市だよ。モノレールで一五分もあれば行ける」

イルカやチヨウ鯨が跳梁する地図を思い描いて、Mの声はどこか遠い調子を帯びる。

「あっ、駄目、駄目ですよ！」

悲鳴を上げた女の顔が不意に消えたかと思うと、すぐさまふくれっ面になって帰って来た。

「どうして、そう、おいたばかりするんですか、もう一つ。奥さんに言いつけますよ」

はだけた胸をかき寄せながら、女は扉の陰の悪戯者を鋭くたしなめる。しか

しその顔はすぐさまこぼれるような笑みに変わった

「次は事前に電話をいただいた方がいいですね。何しろお兄さんは今、とても忙しいので」

「わかったよ。じゃ、兄貴によろしく、な」

軽く手を上げて去るMの背後で、かすかな音を残して扉が閉じた。

\* 島へ

痩せぎすの体を前傾させ、ビニールバッグの痕を砂浜に長く残しながら、波打際を海と並行に急ぐ。夕暮れ時とあつて海岸にはサーフボードを抱えた男女がゆつくり往来するほか、人の姿はまばらである。

空き缶や西瓜のかけらの間を縫って栈橋へと急ぐ。しかし防波堤へ上がる階段の手前で、ベルがけたたましく鳴り始めた。

「お急ぎ下さい。島行き最終便です」

黒靴を肩から提げた男が、切符の束を振りながら叫ぶ。階段を一気に駆け上りながら大声で呼び返した。

「すみません、乗ります—」

「急いで—！」

声にせかされて懸命に棧橋を走る。黒靴の男もMの渡した紙幣を握って一緒に駆け出していた。ビニールバックが、板張りの継ぎ目に当たって断末魔の叫びを上げる。ひつたくるように切符を取ったMは初めて男を正面に見て、そこに懐かしい顔を発見する。なんだ、鼻下髭じゃないか——。髭の周囲にはあの優しい笑顔が広がっていた。Mも同じ笑顔を返し、バッグをデッキに放り投げながら昇降板に飛び移った。

軽快なエンジン音を響かせていた船はMが乗り込むと同時に岸壁を離れた。

買物帰りの女性や下校途中の学生でごった返す船室を避けて、通路脇の階段から上部デッキへと上がった。そこは階下の喧騒が嘘のよう。手すりにもたれて白い航跡を眺める学生がいるだけだった。Mは船首に近いベンチに腰を下ろすと、バッグを引き寄せてひとつ大きな息を吐いた。

振り返れば棧橋はすでに波間に去り、夕陽に染まった水族館も背景の山々に溶け込もうとしていた。不意に船体が激しく揺れ、船が湾外に出たことを知る。「おい、そんなところにいると濡れるぞ！」

初老の船員が船橋から胡麻塩頭を突き出した。Mが中央のベンチに移った途端、ドゥーンという衝撃とともに、今まで座っていたベンチを波が洗った。バッグを抱える背に風に巻かれた飛沫が襲いかかる。だが波がデッキを洗うような揺れはそれが最後だった。Mはバッグの中身の凹凸を確かめるように撫でると、それを枕に横になった。

さっきまで快晴だった空にはいつの間にかどす黒い雲が垂れ込め、嵐が近いことを告げていた。Mは両手を胸の上で組み、周期の短い揺れを背中に感じながら、やがて深い眠りに落ちた。

\*半魚人ごっこ

ドアノブに手を伸ばした途端、だめ、だめ、という嬌声と、グルルーツという唸り声がドアの奥で上がった。はじかれたように離れた刹那、すれ違いに胸元を大きくはだけた女が飛び出して来た。

〈グルルーツルーツ、グルルル……〉

唸り声を上げて追いかけてきたのは半魚人？——。いや、違う。よく見れば、それは半魚人スーツに身を包んだ中年男だった。男はせり出した腹を波打たせ、壊れた蝙蝠傘のような背びれを振り立てながら女の腰にすがりつこうとする。

しかし女は追いつかれる寸前にするりと抜け、また数歩先に立つ。動きの鈍い男は額に脂汗を浮かべ、肩で息をつきながら必死で迫り、再び同じパターンが繰り返される。

Mは扉に背を預けて、その卑猥なショーに見入っていた。哄笑と唸りがテールを二周する間に、女のワンピースは尻の割れ目が見えるまで引き裂かれていた。男はといえば、目を剥いて、ほとんど失神寸前である。

最後に女はドアを背に男性雑誌のピンナップのポーズで立ち、四つん這いになった中年男を静かに待ち受けた。

「今日の半魚人ごっこはこれくらいにしましょう。いくらお魚好きでも、ちょっとおイタがすぎるわよ。ねっ、館長さん」

女はようやく追いついた男の肩を、爪先で軽く押し返しながら、ドアの隙間から徐々に消えていく。息も絶え絶えの半魚人は鱗の尻を力なく揺すって、ほ



っそりした足首に従った。

音もなく扉が閉じ、残るは狂乱のあとの静寂ばかり。ふうーっ、と長い息を吐いたMは、その時になって初めて館長と呼ばれた男が誰か気づいた。

振り返ると、薄暗い廊下には人影はなく、最前Mが誤って開けたのと同じ鉄の扉が非常口まで並んでいた。監獄を思わせる灰色の扉には〈第一標本室〉〈第二標本室〉〈第一解剖室〉などの札が掲げられていたが、先程の部屋には〈無断立入り禁止〉の赤ペンキが踊っているだけ。Mは通路の奥を見透かしてから、そのドアを引き開けた。

乱雑に吊るされた十数着のスーツから一着を選ぶのは簡単だった。気に入っただesignを引き出すだけで、隅々までフィットすると確信できたからだ。ついでに館外に広がるS湾を、白波蹴立てて突き進む己の雄姿も想像できた。

——地図の〈日の丸イルカ〉のように水平線上を軽やかに跳ね、翻って水中深

く潜航するのだ。シノーケルやウエイトなどの助けは借りず、どこまでも深く、三万六千フィートの深海底まで……。

再び廊下に現れたMの背には異様に膨らんだビニールバッグがあった。何かの苦役のように腰を曲げた男は、早足で中庭を抜けると、その巨大バッグを植え込みの陰に投げ込んだ。次いで正面玄関へと引き返すと、ホールを大股に横切って、金属柱の上の受話器を取り上げた。

不意に背後から、潮の香を含んだ風が吹き渡って来た。Mはダイヤルを回すと、相手の声 wait 待ってゆっくり囁くように話し始めた。

「……もう、いいんだよ。書類の件なんて」

「えっ、どちらにおかけですか？」

海はすでに終末に至る生命形態を刻み終えているのかもしれない。

\*再会と別離

約束の時間はとうに過ぎているのに些事に時を費やし、一方でそのことに燃えるような焦燥感を感じている——Mが目覚めたとき、真つ先に浮かんだのはこれまで何度となく見たこんな夢だった。その前には、古びた応接室で、半裸の男女が演じる狂態を眺めていたようだが、定かには思い出せなかった。

まだ醒めやらぬ目で船尾を見やると、救命ボートの陰で、手すりから身を乗り出している男がいた。水族館でモデルをなじり、館長室で痴態を演じていたあの魚狂いのカメラマンである。Mは依然揺れの収まらないデッキを横切つて傍らに並んだ。男は一瞬振り向いたが、直ぐにフアインダーの中に戻つていった。Mも長いレンズの先に視線を重ねて、暗い海面に被写体の姿を求めた。だ

が、見えるのは白く泡立つ波頭だけ。他には何も見えなかった。

失望して立ち去ろうとした刹那、鋭く尖った頭が波を割った。フィルムの巻上げ音が海獣に似た唸り声を立てる。最初、小型の軟骨魚類かと見えた生物は、波に没し去る寸前に半魚人の女だとわかった。細い足首に続く長い甲が、力強く海面を打ったからである。Mは短い叫びを上げると、今にも飛び込みそうに身を乗り出す。

「おい、落ちるぞ！」

胡麻塩頭が背後で声を張り上げた。

次に女半魚人が出現したのは、最前より波二つ船首寄りの海面だった。その驚異的な泳力は連絡船の船足をやすやすと超えてしまったのだ。

「人魚だ！」

「へ日の丸イルカ」だ……」

「おいつ、余り首を振るな！」

いつの間にか横に立っていた老船員が吠え、Mは半漁人の背に夜目にも鮮やかな日の丸を認めて嘆息を漏らし、カメラを構え直した男が、水族館の時と同じ鋭い叱声を発した。すると、それに応えるように、女半漁人が波を蹴って高々とジャンプした。

次の瞬間、背中の日の丸がはらりと落ちて、それがバスタオルの絵柄だったとわかる。暗い水面に舞い落ちたタオルは、沈没船の旗のように波間に漂ったかと思うと、たちまち海中に没した。半漁人の女も水中深く潜ったきり、二度と浮かび上がって来なかった。

「悪いものを見てしまった、悪いものを……」

首を力なく振りながら老船員は重い足取りで船橋へ引き返して行った。手ずりに身を預けながら静かにカメラを下した男は房事のあのような虚ろな目

を向けた。Mの視線に出会うと、膨らんだ頬に赤味が差し、熟れたピーマンのようになつた。

「君はなにか尋ねたいことがあるといつていたね」

魚たちへの叱声とは打って変わった穏やかな物言いだつた。

「それは多分、水族館で出会つたお魚さんたちに関することなのだろう。でも、それを私に求めても無駄だよ。私は魚類学者でも、精神分析学者でも、まして哲学者でもない。一介の好事家に過ぎないのだから」

男は悩まし気に言うと、天球をなぞるように暗い空を眺め渡した。

「ぼくはただ、Sを探しているだけですよ」

Mは、あなたの苦悩はすべて承知していますよというように、男に笑いかけた。それから、なぜ、Sと言つて書類とは言わなかつたのかと自問した。すると今や二つ頭の中で入り乱れ、どちらが真の目的か分からなくなっている自分

に思い当たった。

——結局のところどちらでもよかつたのかもれない。すべてはこうして海岸線を徘徊するための口実に過ぎなかつたのではないだろうか？

「もちろんそうだろう。君は〈チヨウ鯨〉を捜し、〈日の丸イルカ〉を捜し、〈失われた書類〉を捜し、Sを捜し、〈Ma子〉を捜す。そうやって、この海岸地帯を迷路を行く者のように徘徊する。まるで、いつかは真のゴールに到達できると信じているかのように、ね。だが、残念ながら君は永久にそこに行き着かない。なぜなら真のゴールなどというものは、元々君の頭の中にしか存在しないのだから」

「多分、そうなのでしょうね」

〈Ma子〉のアパートを出て以来の道のりを想い出して、Mは男の言葉に心から賛同する。

「だから、こう考えてみてはどうだろうか。君は今まで巡り合った者たちに、四方八方から串刺しにされており、今後も永遠にそうされるだろうと、と。ただ、それだけなのだ。つまり君はあの棘の生物のように、〈チヨウウ鯨〉に、〈日の丸イルカ〉に、〈失われた書類〉に、〈M a子〉に、〈ねずみの係長〉に、〈狭心症の課長〉に、〈出札所の女〉に、〈喫茶店の鼻髭男〉に、〈水族館の魚狂いカメラマン〉に、針ネズミに……されておられ、これからも四方、八方、一六方からAに、Bに、Cに、Aに、Iに、1に、2に、アルファに、ベータに、サイン、コサイン、タンジェントに射抜かれながら、さらに◎に、△に、☆に、●、※に……。」

充分すぎる回答だった。Mは暗い海に向かって眩き続ける男——すなわち〈魚狂いのカメラマン〉として、〈水族館長〉として、〈狭心症の課長〉として、〈巨大ヒップの半魚人〉として、その他もろもろとしてMを串刺しにし、逆に



自らも串刺しにされている男の横顔に、無言の別れを告げた。そして大粒の雨が落ち始めたデッキを渡って、ビニールバッグのところまで引き返した。

船首方向に、土饅頭を押しつぶしたようなE島の影が次第に大きくなっている。急速に強まった雨足が、バッグを開ける手の甲を痛いほど打った。引きずり出した半魚人スーツを目の前に掲げ、自らの体型と引き比べるように眺める。やがて得心したか、二、三度小さく頷いてからベンチに置いた。続けて、フィン、スノーケル、水中マスクなどをその横に並べていった。

濡れたシャツのボタンに手を掛けながら、Mは船尾に向けて最後の一瞥を送る。カメラマンの姿はすでになく、ただ黒い雲と黒いうねりが茫漠と広がっているばかりだった。Mはすべての衣服を脱ぎ終えると、半魚人スーツの後ろ手ヤックを下ろして、その中に両脚を滑り込ませた。

\*ネットワーク

黒いワンピース水着の女が壁際のソファーに寝そべって、古びたアルバムを所在なげに繰っている。女の全身はシャワー直後のようにぐっしり濡れ、大粒の水滴がソファーからコンクリートの床に滴り落ちている。

女が不意にアルバムを繰る手を止めた。

「ねえ、この書類はなに。ここに挟んである？」

ソファーからはみ出した長い脛がブルーサイドの水遊びのように揺れている。

「例の退職願だよ」

一枚の写真を蛍光灯の光にかざしている白衣の男が答える。男は最前から、眼を思い切り細めては小刻みに首を振り続けている。

「ああ、Mさんの。Mさんといえば、あれきり音沙汰なしね。ふふっ、でも馬

鹿みたい。あの時はわたし、すっかり勘違いして。あなたの弟さんと取り違えて、最後まで気づかなかったのだから」

「だから、ぼくは弟とは全然似ていないと言っただろう」

天井を見上げながらからかうように言うと、男は写真を丸テーブルの上に投げ出した。

「やはり、もっと引き伸ばしてみないとわからんか」

「でも、なぜそんな大事な書類がここに？」

女は皺の寄った紙を指でつまんで、顔の前でそよがせた。男は天井を睨んだままテーブルを回ると、長く伸びた姿態の前に立つ。

「ぼくの役所時代に、照会文書と間違えて退職願を送り付けて来た間抜けな男がいた。それが管財課のM君だったというわけさ」

「でも、そんな間違いってある？」

女は滑るように態勢を変え、男の座るスペースをつくった。

「たとえば、ここに、いつか役所をやめようと退職願を内ポケットに忍ばせていた男がいたとする。男は余りに長く持ち歩いていたせいで、いつしかその存在さえ忘れているんだ。この男が何かの拍子に、そう、例えば、ふとかかかってきた電話に気を取られている隙に、照会文書の代わりにそれを封筒に入れてしまった。こういう間違いはありえないことではない」

「Sさんらしい、いい加減な話ね」

「いや、全部本当の話だよ」

男は女のむき出しの肩を抱き寄せて、その一番尖った部分に口づけする。

「その証拠にこれを見てご覧。館長が以前、連絡船のデッキから撮った写真を焼き直してみたんだが、波間に人間とも魚ともつかぬ黒い影が見えているだろう。夕暮時、しかもこんな荒れた海を人間が泳げると思うかい？　だとすった

れば……」

「えっ？ これはいつもの実験じゃないの？ 被験者はあなたか、あなたの綺麗なお弟子さん。〈Ma子〉さんといったかしら……」

女は水着からはみ出した扁平な胸を男の手に預けながら、まだ水滴の残るキヤビネ写真を覗き込む。

「いや、あの日はマコの看病にかかりつきりだった。それにあの娘にはまだ外洋での遊泳は禁じているから。……いや、ぼくが言いたいの、館長の強烈な願望はもはやそれをフィルム上に作り出すまでに高じたということさ。人間というのは、あらゆる願望をとにかく実現してしまうものなんだ」

「待って、これ、館長のスーツではないかしら？ ほらっ、例の倉庫から盗まれた……」

シャツのボタンをはずす手を止めた女が写真の黒い影を指さす。男の手が膝

小僧を割って滑り込むと、女は少しねじれながら背後に体を投げた。

「そう言われれば確かに。でも、どうして？」

片足を背もたれに掛け、思い切り足を開いた女の上に、ズボンをずり下げた男の生つ白い尻が覆いかぶさっていく。

「ちよつと待って」

女は片手で男の胸を受け止め、別の手で頭上に突き出した蛇口の栓をひねった。次の瞬間、時ならぬスコールが二人の上に降り注ぐ。

「ああつ、素敵！ わたしも早くへMa子さんのような潜水セックスが出来るといいのにな。あなたと抱き合ったまま一息に海の底まで落ちて行くのよ」  
「そうか、あの日、朝から館長が倉庫の中で騒いでいた……。あの盗まれたスーツがこれか」

もぞもぞと腰を動かしながら、男が低くうめく。

「ねえっ」と、薄眼を開けた女がため息のように吐き出す。

「あなたが渡した手紙の中身って、結局何だったの？」

「地図だよ。研究所までの順路を描いた。やつに、この大事な書類を返してやろうと思つてね」

「だったら、なんでそんなまだるっこしいことを」

「すぐに分かると、かえつて分からないものだ。だから順々に分かせてやりたかったのさ。なにか他人のように思えないんだよ、あの男……あれ？」

腕立て伏せの姿勢のまま、テーブルを見つめた男が怪訝な声を上げる。

「あれっ、書類が……。ついさつきまでここにあつたのに……」

「ねえーっ」

唇を尖らせた女が長い脚で男の尻をリズムカルにたたく。娼婦の督促にのろのろと腰を動かしながら、男は壁の奥に潜む者たちの暗い姿態を想う。忙しな

い胸緒の動き、棘アンテナの絶え間ないざわめきが伝える情事は、中性子星の回転速度で館内ネットワークを巡り、間歇的に水族館の外へと漏出しているのだらう。もちろんその前にあの偏執男の周囲を巡って、鱗の巨大ヒップをきり舞いさせているはずだが。

「ねえーっ」

内腿にバルス状の電波を走らせた女が鼻声を上げる。男は短周期で繰り返される濃密な信号をアンテナに受けながら、どこかでその情報に聞き耳を立てている管財課員に思いを馳せた。

あの男もようやく、遠い雲間のざわめきを聞くすべを得たのではないだらうか。とすれば、インチキ地図や〈Ma子〉を使った半魚人デモも決して無駄ではなかったわけだ。

「ねえ、ねえーっ」



白い喉をさらした女の首振り速度が次第に早まる。男はそのリズムにすべてを委ねる直前、煌々たる月光を浴びながらおぼつかかなげなポーズを取る全裸男を見たような気がした。

「ねえ、だから、やっぱり弟さんなんでしょ、あの人」

\* 汀線都市

深夜、心地よい疲労感とともにMは水族館の前浜に上陸した。夕方から降り続いた雨も今やすつかり上がり、宙天には星々を欺いて、凄まじいばかりに蒼い満月がかかっていた。

上陸した瞬間から、Mはその砂浜が先ほど後にしたのと同時代のものではないと了解した。おそらく何千年か、何万年か未来の、いずれにせよ一つの世界が終焉を迎えた後の世界だろう。白亜の水族館も、緩やかな弧を描くモノレー

ルも、色とりどりのビーチパラソルもなく、無人の白い浜を砂混じりの風が吹き渡るばかり。

Mは波打際を斜めに横切つて乾いた砂の上に出ると、体を締め付けていたスーツを脱ぎ、銀色の脱殻に帰したそれを汀に向かつて放り投げた。黄金色の雫を滴らせながら放物線を描いた半魚人の死骸は首から砂に突っ込み、束の間月下の仙人掌を模した。その硬直した姿態をMの足跡と一緒に波がさらうのにそう長くはかからないだろう。

二つ目の砂丘を越えると、谷あいの窪地に畳一畳ほどのコンクリート床が露出していた。ほぼ中央に、世界から隔絶されたように屹立する物体は、あの電話機を載せていた金属柱である。Mは真つ直ぐに歩いていくと、冷たいコンクリートの感触を足裏に感じながら、その周囲をゆっくりと回り始めた。

置台の上にはダリ風電話機の代わりに、倍近く膨張した電話帳——というか、

かつてそのような機能を担っていた紙塊が載っている。一巡したところで足を止めると、展望台のパノラマ地図を見るように、波打つページを覗き込んだ。

(25ページ『官公庁に準じる法人、病院、診療所』)

Mの口元に微かな笑みが浮かぶ。そのページの右上隅には〈Ma子〉の勤務先の半官半民会社が長たらしい社名を載せているはずだった。Mは記憶の数字を紙塊に浮かび上げらせようとして、その配列をどうしても確定できないのに気づく。

二〇二の二〇……だったか、あるいは二二〇の〇二……、ともかく彼女が昼下がりの遊泳タイムを満喫できると嘯いていたお気楽会社のダイヤルナンバー。多分あの日も、例のバスタオルを肩にホテルのプールサイドを悠然と歩き、気の向くまま父親仕込みの本格平泳ぎなどを披露していたはずだ。それがわかっていながら、なぜ、洋上に姿を見たなどと思い込んだのか。

Mは再び金属柱の周囲を今度はテープの早送りの速度で巡り始めた。

雨の海に無我夢中で身を躍らせたMは、甲板から波頭までの数メートルの間にすべてが錯覚だったと悟った。老船員の叫び声、投下されたロープ、大きく振られるライト……。夢うつつのまま波頭を越え、海中に没し、水面を突進した。そしてついに気を失いながら、なおも腕を振り回し続けた。意識を取り戻した時、Mは自分が未来のE海岸に泳ぎ着いたと知ったのだった。

不意に足を止めたMは、紙のブロックを両手で払い落とし、滑らかな上面に手をかけた。思い切り腕を突っ張って足を浮かせると、金属のしんとした冷たさが裸の内腿に滲み、彼の来たった都市世紀の終焉を告げていた。その冷やかな訓えの何という心地よさよ。つるつる滑る金属柱を両腿で挟んで這い上がる間に、あやうく射精しかけほどだった。

柱の上に立ち上がったMは首を捻って夜空を見上げ、しばし雲間のざわめき

に耳を傾けた。その針金彫刻を思わせる姿態に、しかし彼方の声はやはり訪れない。一瞬目を隠した白い雲が砂丘を渡る風に吹き払われる。能面の顔にかすかな亀裂が入ったかと思うと、たちまち泣き出すように歪んだ。

〈リリーン、リীন、リー……〉

その場にくずおれたMは膝の間に顔を埋めてしばし肩を震わせていた。それから決然と顔を起こしたが、その目には涙の跡はなかった。

〈はいっ、こちら管財課ですが……〉

分解した動作を再構成するかのように、Mは一つずつ区切って両腕の上に膝を乗せた。それから重心を徐々に前に傾け、震える爪先を静かに金属面から離していく。

〈えっ、どちらへおかけですか？〉

〈Ma子〉直伝のヨガポーズ「鶴のポーズ」——その未熟な形は、水族館のひ

なくれ受話器を模したように危うく揺らぎ続けている。

「へどうも電話が遠いようなんですが」

空の一角から舞い落ちた紙がヨガ男の頭上で鮮やかな宙返りを演じる。二回、三回と翻った後、Mの眼前を斜めに横切ると、後を追うように飛来した何千、何万の書類の群れに紛れ込んだ。

「へえっ？　ちよつと待って。一体なんのことですか？」

夥しい書類はその一枚一枚に前歯を欠いた老女の笑い、〈Ma子〉の背の窪み、チヨウ鮫駅員の歯列、憑かれたSの眼、シユール電話機の震え、心室肥大男の青ざめた顔、棘玉アンテナのそよぎ、銀色リリースのうねり、鱗の巨大ヒップ、海上を舞う日の丸タオルなど、あらゆる場面を焼き付けていた。

「へもしもし、あなたは誰？……もしも……」

Mはすべての絵を凄まじい速度で……ほとんど永遠の一瞬と言わなければならない

度で読み解きながら、あの魚狂いカメラマンの忠告に反して、それらを一枚の絵に収束させようとしている自分に思い当たった。Sの記号も、へMa子への赤痣も瞬時に読み解く、スタートであつてゴールであるような一枚の絵に。

再び月を見上げて銀線のような笑みを浮かべたMは、ヨガのポーズのまま、円柱の中心線を軸にゆっくり回転し始める。結局、すべてが一枚の絵に還元されるにせよ、ただ無数の絵を際限なく読み続けるだけにせよ、この三六〇度回転を終えるまでは心弾む人間電話器をもう少し続けてみることにしよう。

月下のヨガ男はぶるぶる震え始めた両腕に最後の力を籠めた。

退職願

私儀

このたび一身上の都合により、勝手ながら  
一九八一年 月 日をもって退職いたします。

一九八一年 月 日

総務部管財課

M・S  
印

F市市長  
S・H 殿



汀——海と陸が交わるところ。そこにはあらゆる想念が渦巻いている。